

(P1の続き)

質上の糖鎖は、特定の糖鎖構造を認識するレクチンとよばれるたんぱく質と相互作用することでさまざまな生命現象に関与しています。

糖鎖は細胞の表面を覆い細胞を守るバリアとして働きます。一方で、ウイルスや細菌などの病原体が細胞に侵入するために細胞表面の糖鎖を利用することがよくあります。ウイルスのいちばん表層に存在するたんぱく質にも糖鎖が付いていることが分かっており、この糖鎖はウイルスが感染した宿主細胞がもつ糖鎖の種類によって変化します(図3)。しかし、ウイルス粒子上の糖鎖構造の違いに着目した研究はこれまでほとんど実施されていません。私たちの研究分野では、出血熱や脳炎などヒトに重篤な症状を引き起こすウイルスに注目して、ウイルス上の糖鎖構造の違いが、病原性にどのように関与するのかを明らかにしたいと考えています。特にヒト以外の動物で増殖したヒトにはない糖鎖の付いたウイルスがヒトに感染した場合に、どのような病態を引き起こすかを明らかにすることによって、糖鎖に注目した新規治療法やワクチンの開発につなげることができればと思い、日々研究に励んでいます。

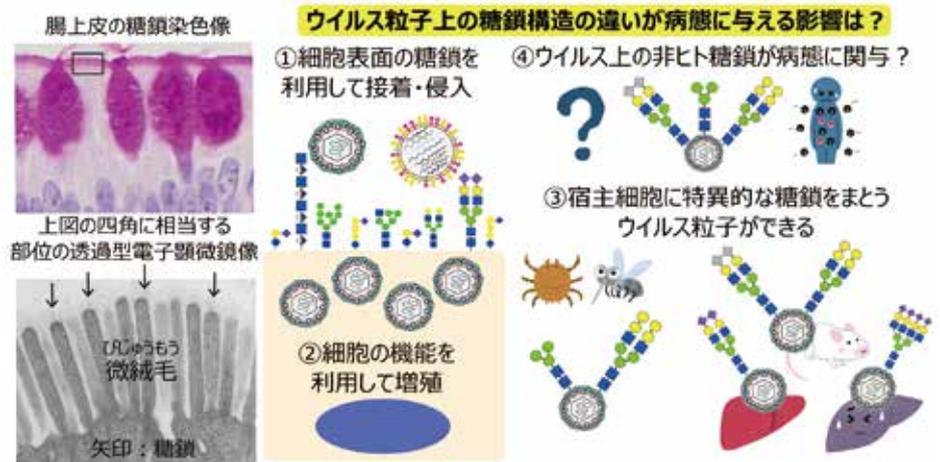


図3:ウイルスに付いている糖鎖が病原性に大きく関わっているのでは?

市民公開講座の開催

2025年3月22日(土)、市民公開講座「不測の事態を予測する」そして「正しく恐がる」ことの大切さ(講師:森内浩幸 高度感染症研究センター長・教授)を開催し、会場・オンライン合わせて約90名の参加がありました。講演ではまず、感染症の流行が歴史上大きな影響を与えてきたことの説明がありました。その後、新興感染症は動物の感染症が人へ伝播することで発生してきたこと、森林破壊などにより野生動物と人との接触が増えていることが感染症発生のきっかけになることについて解説がありました。また、発生した感染症は地球規模での人の移動、人口密度の増大によりパンデミックにつながり得ることなどがわかりやすく説明されました。さらに、COVID-19によるパンデミックの発生被害、その対策に係る問題点などについて詳細な解説がなされました。最後に、高度感染症研究センターにおける研究が不測の事態に対する備えとして重要であることが紹介されました。会場の中高生からは、人獣共通感染症の研究における医学と獣医学の協力、パンデミック時に避けるべき過度な対応、などについての質問がありました。終了後のアンケートでは、感染症についてよく分かっていない段階で過度に対応することは不要なリスクを増やすことが理解できた、などのお声を頂きました。



お問合せ先 ご意見・お問い合わせはこちらまでお気軽にご連絡ください。

長崎大学高度感染症研究センター

〒852-8523 長崎市坂本1丁目12番4号

フリーダイヤル 0120-095-819

より詳しくお知りになりたい場合は、ホームページをご覧ください。

ファックス 095-800-4301

ホームページアドレス <https://www.ccpid.nagasaki-u.ac.jp>

